

氏名(国籍)	魯 学 海 (中 国)
学位の種類	博 士 (学 術)
学位記番号	博 甲 第 1,611 号
学位授与年月日	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	哲 学 ・ 思 想 研 究 科
学位論文題目	李退溪と江戸前期朱子学 — 理気論の地域的特性の研究 —

主 査	筑波大学教授		奈 良 博 順
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	竹 村 牧 男
副 査	筑波大学助教授	文学博士	堀 池 信 夫
副 査	筑波大学教授	文学博士	池 田 元
副 査	筑波大学助教授		中 村 俊 也

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、朝鮮の朱子学者李退溪の理気思想の独自性を明らかにし、さらに彼の思想が江戸時代前期の朱子学者林羅山と山崎闇斎にどのような影響を及ぼしたかについて究明することを目的としており、序論・結論を含む5章と参考文献目録とから構成されている。

序論では本研究の目的および方法、研究領域、本論文の構成について述べ、朝鮮および日本の朱子学者の思想構造についての比較研究を意図したものであると述べている。

第1章「朱子の天理」では朱子の基本思想である理気論について論じている。先にふれたように、本論文の目的は李退溪および林羅山、山崎闇斎の比較研究にあるが、その基準を明示する意味で理気論を中心に朱子の思想についてまず明らかにしている。すなわち、朱子の理気説は「太極解義」を中心に展開されており、それは「理先気後」と「理気不離不雑」の二点に要約されるという。朱子によれば太極は即ち理であり、有形の世界のすべての道理や規則は理に帰着しているため、理はすべての根本であり、出発点であり、その意味で理の世界は「一」である。そのような理を朱子は「天理」とも言っているが、それは理を本源としてとらえたものである。それに対し気は理の表現にすぎず、それ故朱子にとって理のない気はありえないが、気のない理は実在しうるとし、朱子はこのような状態を「理先気後」と規定していると述べている。一方「理気不離不雑」というのは理気を稟賦の視点でとらえたもので、気が理に従って物の形体を形成し、理が気の形体によって現れるのであって、稟賦の視点はまさに理気両者の共存関係を示すものであるととらえている。

次に第2章「李退溪の義理」においては、李退溪と並んで朝鮮朱子学の双璧と言われている李栗谷その他の朱子学者との思想比較をしながら、退溪思想の特徴を明らかにしている。従来李退溪の思想について、彼は理気二元論に立ち、しかも朱子思想の忠実な信奉者のように理解されてきたが、退溪の言っている理は、常に気と共存するものであり、彼の理についての論議はすべて稟賦の視点に立って行われており、朱子の理気論における「理先気後」の側面は退溪においては脱落していると指摘している。さらにその点は退溪の性についての見解にも表れており、人間にあっては理は「天地の性」となり、気は「氣質の性」となり、同じ性に二つの側面があることになる。したがって、朱子の学説の究極は理であり「一」であるが、退溪の学説の至極は理気の共存であり、「二」となることと述べている。そのために退溪は常に理と気との間に尊卑・貴賤の区別を立てることになり、その結果朱

子の思想が世界の究極は何かを問うのに対し、退溪の思想は倫理の本質、善悪の問題等に向かっており、朱子が「天理」を探るのに対し、退溪が「義理」つまり人性の道理を語ることになったと指摘している。さらに、従来あまり注目されていなかった退溪の「天命新図」、「天命図説」や「聖学十図」の分析から、そこには退溪思想が濃縮されており、それが宇宙の究極ではなく、人間の道德行為についてであると述べている。

第3章「羅山と闇斎の事理」では、江戸時代初期における二人の朱子学者林羅山と山崎闇斎とを取り上げ、退溪の思想が上記2名に及ぼした影響について究明しようとしている。すなわち、従来江戸時代初期の思想についての研究は、当時の支配的思想は中国伝来の朱子学であるという前提に立て行われていた。しかし16世紀末ごろ大量の朝鮮書籍が日本に招来され、日本の思想界はその強い影響を受けており、特に退溪の理気論における稟賦の視点は羅山や闇斎にも見られ、前者の「理気不可分」、後者の「理気妙合」は共に理気共存の立場に立つものであって、退溪と同じく「理先気後」の側面は取り入れなかった、と指摘している。

さらに「心即理（又は明德即理）」は羅山と闇斎の共通点であるが、これによって形而上の問題が脱落し、窮理よりも居敬が重視され、人はひたすら善心を維持して、つつしむ（敬）という修養が強調され、日本の朱子学が中国・朝鮮の朱子学より道德的側面を重視するようになったと述べている。特に闇斎は主敬説を取り、敬は人間行為の根拠であり、天地の開始以来聖人が伝えてきた心法であるとしているが、彼のこのような主張は朱子以来の窮理を否定し、脱朱子学を宣言したものであると指摘している。

「結論」においては、これまでの論述をふまえ、3国4人の理を表現するならば、おそらく朱子の理は天地万物の根本である故に「天理」であり、退溪の理は人間の道德判断とかがわっている故に「義理」であり、羅山と闇斎は形而上の要素が脱落して、物事に即して理を語るの「事理」であると結んでいる。

## 審査の結果の要旨

本論文は朝鮮の朱子学者李退溪の独自の理気説について考察すると共に、彼の思想が日本の朱子学者林羅山と山崎闇斎にどのような影響を及ぼしたかを究明することを目的としている。そのためにもまず中国朱子の理気論の基本構造を考察し、それを基準にして朝鮮および日本の朱子学者の思想を検討するという方法をとっているが、対象とした4名の思想家（朱子・李退溪・林羅山・山崎闇斎）の特徴を明確に把握しているばかりでなく、随所に新たな知見を提示しており、東アジアにおける儒学の比較研究として高く評価できる。

特に1). 朱子について、李退溪研究への序論的意味での朱子論として、妥当な理気論解釈を展開している。この問題については、従来「太極図」と結びつけて究明するものがなかったが、本論文においては、朱子の「太極図」解釈である「太極解義」は朱子が自己の理論的根拠を示したものとして、その思想構造を説明する絶好の資料であると評価している。

2). 朱子は「太極図」についての考察から理気について「理先気後」、「理気不離不雜」という二側面から構成されていることを指摘しているが、李退溪にいたると「理先気後」の側面が否定され、「理気不離不雜」つまり理気共存の立場をとっている。この理気の関係について、従来退溪研究において重要視されていなかった「天命図」および「天命図説」に着目し、検討している。特に「天命図説」は退溪思想を体系化したもので、その特徴が明示されている。その中で彼が最も注目しているのは人間の道德的修養についてである。つまり退溪が追求するのは宇宙の究極ではなく、人間の道德問題であると指摘している。

3). この点と関連して取り上げられているのが四端七情論議の問題である。この問題は中・朝・日3国でしばしば扱われる問題であるが、退溪の理気説との関係でこれを取り上げた研究は、本論文がはじめてである。すなわち退溪の理気論からすれば、道心＝四端＝本然の性＝理という図式とともに、人心＝七情＝氣質の性＝気の図式も成立する。つまり朱子が論じた抽象的な理気関係は、朝鮮にきて善悪をめぐるかなり具体的な道德内容にかかわるようになったと指摘している。

4). また日本の羅山について、早くから「天命図説」を読んでいたこと、それと対称的に朱子の文集や語類には力を入れていないこと、従来羅山の理気不可分に議論が集中していたが、退溪の四端は理、七情は気の説を取り入れている等の指摘は、羅山研究に新たな問題を提起している。

5). 闇斎は理気共存の立場にあり、その点で退溪の枠を越えていないが、気の実解において性と混同し、「本然の性」について理と気を兼ねたものとしていると指摘している。

6). 闇斎は羅山とともに「心即理」を主張したために、理気論の重要性は薄れ、修養説が強くなり、敬の役割を拡大し、敬に天地に行きわたる普遍的性格をもたせており、朱子学者を言われながら、朱子とはかけはなれた主張になっていると指摘している。

以上の諸点の指摘並びにその論証の内容は注目すべき成果である。

しかしながら、他面朱子の思想について、李退溪研究の単なる前提にとらえているため、その範囲内での朱子論に終わってしまい、朱子思想の全体像について明確さを欠いている。また朝鮮および日本の朱子学者の思想構造の解明を中心としているため、思想内容の分析が主となり、それが各時代・地域の現実に対していかなる意味を持つかという機能的な面についての顧慮が十分でないといえよう。さらに3国4人の思想家の理の特徴を、天理・義理・事理にとらえているが、同じく理である以上、相互に関連するところがあると思われるが、その点への言及がない等々、今後著者の研究に俟つところである。

以上本論文は多少の不備はあるものの、全体として中国・朝鮮・日本の3地域の朱子学の比較研究として、その思想構造の違いを的確に把握して新しい知見を加えるなど、その成果は学界に貢献するところ大であると認められる。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。